

メソポタミア考古学研究的近年の歩み

小口 裕通

Recent Topics in Mesopotamian Archaeology

Hiromichi OGUCHI

キーワード：メソポタミア、ニップール、ディヤラ、ユーフラテス、テル・エン・ネムル

Key-words: Mesopotamia, Nippur, Diyala, Euphrates, Tell en-Neml

「湾岸戦争」そして「イラク戦争」と相次ぐ不幸なできごととは、イラク国内での発掘調査の進展を妨げると共に、メソポタミア考古学¹⁾の研究面での進捗をも遅らせるという事態を招いた。特に「イラク戦争」後のイラク国内での治安の悪化は、回復する見込みがなく、イラクで発掘調査を行っていた外国調査隊が発掘の再開と継続を断念せざるを得ないという状態にまでなっている。イラクで調査を行っていた外国調査隊の多くは、近隣諸国、例えばシリアやヨルダンへとその活動の場所を移し、むしろ近頃ではメソポタミアの周辺地域での発掘調査がかなりの進展をみせると共に、研究面での進捗もめざましいものがある。とはいうものの、イラク国内では、特に「湾岸戦争」の後「イラク戦争」に至るまでの間、イラク人自身による発掘調査が断続的に行われ、ある程度の成果を収めていることも事実である。ただ、イラクから国外への情報が伝わりにくく、またその成果が公開されることがなかったため、研究面の発展に寄与するまでには至らなかった。

このような状況のなかでも、「湾岸戦争」以前に行われた発掘調査の成果を基盤にした研究が外国の研究者によって僅かながら進められ、それでも興味深い問題が提示されるに至っている。また、イラク人自身による考古学上の調査についても、イラクを訪問した英国の考古学者が、十分ではないが、伝聞というかたちでの情報を提供してくれている²⁾。そのような情報のなかにも、研究面でかなり重要だと思われるものが含まれていることは見逃せない。

元来、この特集で割り当てられたこの部分の目的とするところは、メソポタミア考古学での研究の、ここ10年間での発展状況を紹介することにあるが、上記のようなイラク情勢のなかで、メソポタミア考古学は近年ほとんど研究面での進捗をみていないのが現状であり、従って、本稿では、前述したような内容を紹介するとどめざるを得ない。つまり、ここでは、過去の発掘成果を基盤にした研究とそれが提示する考古学上の新たな問題を紹介し、イラク人自

身による発掘調査の成果からの、今後の研究に寄与するだろうと思われる話題を間接的な情報をたよりにして取り上げ紹介するとどめる。

南メソポタミア

初期王朝時代についての編年は、バグダードの北東のディヤラ川流域にあるテル・アスマル (Tell Asmar) 及びカファジェ (Khafaje) の発掘調査からの層位的証拠を基盤にして樹立されたものであることは周知のことであろう。ディヤラ地域の調査では、初期王朝時代の時期細分は、初期王朝時代第I期、第II期、第IIIa期、第IIIb期 (EDI, EDII, EDIIIa, EDIIIb) とされ、こうしてバグダードの南方地域すなわち南メソポタミアでも、そのような時期細分を採用し、ディヤラ地域との遺物の比較によってそれぞれの遺跡の層位の時期決定を行うようになっていった。しかし、その後、南メソポタミアにある諸遺跡の発掘調査を通じて、一つの問題が浮かび上がってくることになる。それは、南メソポタミアの当該時期を有するどの遺跡からも、ディヤラ地域で確認された初期王朝時代第II期の指標となる土器 (2タイプのみ) が出土しないという問題であった。つまり、南メソポタミアでは、ディヤラ地域で確認された初期王朝時代第II期が欠損するというわけである。従って、南メソポタミアに於ける初期王朝時代の時期細分は、現在では、苦肉の策として、E. ポラダ (Porada) の編年表 (Porada et al. 1992b: 98, Fig.4) にみられるように、その第II期は削除され、代わりに第I期が前期と後期に分けられ、第I期 (前期と後期) に次いで第IIIa期と第IIIb期と記述されるようになってきている³⁾。

そして、この問題に次いで近年、初期王朝時代の編年に関して興味深い問題が提示されるに至っている。シカゴ大学オリエント研究所のM. ギブソン (Gibson) がイラクのハムリン地域の調査に参加したときから抱いていた疑問

が、ニップール (Nippur) の、1989年から1990年にかけて行われた WF 地区の発掘調査とその成果を基盤にした A. マクマホン (McMahon) の研究によって具現化され、一つの大きな問題として提示されたのである⁴⁾。

その疑問とは、簡単に言えば、初期王朝時代第 IIIb 期の土器のタイプのほとんどが所謂アッカド王朝時代に入っても継続して製作され、使われ続けていたのではないか、というものである。政治的に言えば、アッカド王朝時代はその初代の王サルゴン (Sargon、正確には Šarrukin) の即位年に始まる。つまり、ウルクを征服しその第3王朝の唯一の王としても知られるルガルザゲシ (Lugalzagesi) がサルゴンによって打倒されて初期王朝時代が終焉をむかえる年でもある。それは、中年代説 (the middle chronology) では前 2334 年となる (Brinkman 1977: 335)。従来、前掲のポラダの編年表に見られるように、初期王朝時代第 IIIb 期に相当する土器が出土すると、自動的にその年代が第 IIIb 期の下限とされ、アッカド王朝時代の土器だとわかっているものはその年代以降のものとしてされていたのだが、もしも、第 IIIb 期の土器のそのような継続性が確かなものであるとすれば、物質文化の変容という観点から、従来の編年観は大幅に修正されなければならないことは言うまでもあるまい。まさしく、歴史的観点からなされる政治史的区分と考古学的観点から行われる物の編年が必ずしも一致しないことを、その疑問は提示しているといえるのである⁵⁾。

ニップール WF 地区の調査では 19 層が確認され、その最下の 2 層の XIX-XVIII 層からは初期王朝時代第 IIIa 期に相当する土器が出土している。その上の XVII 層では所謂「ファラ (Fara)」タイプの楔形文字粘土板文書が発見され、そしてこの層から、初期王朝時代第 IIIa 期に関連する土器タイプの他に、初期王朝時代第 IIIb 期とされる土器のタイプが出土し始める (Gibson and McMahon 1995: 5-6)。さらにその上の層、XVI-XV 層からは、アッカド王朝時代の土器タイプと考えられるものと初期王朝時代第 IIIb 期の土器タイプが混ざって出土、そのような土器タイプの混在は上の XIV 層まで続くといわれる。そして、XIV 層では、アッカド王朝時代の確かな指標の一つであるとみなされている土器タイプが出土、加えてアッカド様式のデザインをもつ貝製円筒印章が発見されている (Gibson and McMahon 1995: 6)。さらにその上の XIII-XI 層では、従来アッカド王朝時代のものとされる土器タイプが、その時代を特徴づける完全なアセンブリッジとして見出されるという。そして、XIII 層ではアッカド様式のデザインをもつ円筒印章の押捺のある封泥が、XII 層では古アッカド語で書かれた楔形文字粘土板文書が発見されているのである。また、X-VII 層からは、ウル第3王朝時代の

土器タイプとみなされている土器のほか、アッカド王朝時代の特徴をもつ土器タイプも継続して見出されるという (Gibson and McMahon 1995: 8)。

このような調査結果から、ギブソンとマクマホンは、WF 地区の XIX-XVIII 層を初期王朝時代第 IIIa 期とし、XVII 層を初期王朝時代とアッカド王朝時代間の「移行期 (transition)」として、XVI-XIV 層をアッカド王朝時代の前期、XIII-XI 層をアッカド王朝時代の後期、X-VII 層をウル第3王朝時代に年代づけたのである。そこでいうアッカド王朝時代の前期とは、アッカド王朝の創始者サルゴン、その子リムシュ (Rimuš) とマニシュトウシュ (Maništušu) の治世年間 (前 2334 年～前 2255 年) を指し、アッカド王朝時代の後期とは、サルゴンの孫である第4代目の王ナラム・シン (Naram-Sin) の治世以降のことをいう (Gibson and McMahon 1995: 6)。この時期決定において重要なことは、従来初期王朝時代第 IIIb 期とみなされてきた土器のタイプが、ギブソンとマクマホンがいうところの「移行期」からアッカド王朝時代に至ってまでも (すなわち、その前期まで) 使われ続けたとみなす点にある⁶⁾。その「移行期」を紋切り型に初期王朝時代第 IIIb 期とすることも可能であろう。とにかく、ギブソンとマクマホンが実証しようとしたのは、その第 IIIb 期の土器が政治的にいうところのアッカド王朝時代のあるときまで使われ続けたことなのである⁷⁾。そのような見解が正しいとしたとき、考古学的観点からすれば、「初期王朝時代第 III 期後期/アッカド王朝時代前期 (late Early Dynastic/early Akkadian)」という用語のもとに、そこで問題となる時期をまとめることも可能となるのである (McMahon 2006: 3)。さらに加えるに、ニップールの WF 地区での調査からもわかるように、同じような問題がアッカド王朝時代からウル第3王朝時代にかけての時期でも生じる⁸⁾。つまり、土器タイプの変化という観点から政治史的な時代区分をすることの困難さを、それも示しているといえるであろう。

ギブソンらの論議⁹⁾にみられるように、この問題に関係する考古学の対象物を、例えば建築関係のもの、土器、円筒印章 (あるいはその陰影の残る封泥) というように分けたとする。そうすると、まず最初に初期王朝時代とアッカド王朝時代の時代区分の手がかりにならないものとして挙げられるのは、初期王朝時代の建築の特徴とみなされていたプラノ・コンヴェクス型レンガである。それは、今ではアッカド王朝時代にも使われていたことが実証されているのである (Gibson and McMahon 1995: 1)¹⁰⁾。土器についても、そのような政治史的時代区分の手がかりにならないことが、ニップールの調査を通じてわかってきている。残るのは円筒印章のデザインの様式だが、それは建築関係のものや土器よりも政治的な変化の影響をすぐに受けやすい

と考えられ、現在、その様式の変化は政治的な変化とほぼ一致するのではないかとみられている¹¹⁾。いずれにせよ、初期王朝時代のみならず他の歴史時代においても、南メソポタミアにおける物自体の編年が確立されるまでにはまだ時間がかかりそうである。その意味でも、イラクにおける発掘調査の早期再開が望まれてやまない。調査が再開され研究が進んだ将来、物自体の編年が確立され、それが現在メソポタミアで行われている政治史的時代区分と、どのような相関関係におかれるのか、またどのように食い違ひのかが、はっきりする日が来るであろう。

中部メソポタミア

アッシュール (Aššur) の下流にダムを建設し始めたため、その遺跡自体が水没の危機に瀕していたことはよく知られている。その水没予定地域のなかにある遺跡がイラク人自身によって調査されていたことも知られているにちがいない。実は、そのなかの一つの遺跡で考古学的に重要な発見があったのである。

その遺跡の名はテル・エン・ネムル (Tell en-Neml) という。アッシュールの南約 15 km のティグリス川東岸に位置する遺跡である。発掘調査は 1997 年から 1998 年にかけて行われ、そこでは初期王朝時代の円形建物が、壁の高さが 2m を超えた保存状態で発見されている (McDonald 1998: 5; McDonald and Simpson 1999: 200; Oates and Oates 2001: 5)。初期王朝時代の円形建物といえば、国士館大学の発掘調査隊がハムリン・ダム水没地域で発掘したテル・グッパのものが思い浮かばれよう¹²⁾。ネムル遺跡のものは、グッパのものよりやや規模が小さいが、グッパのものと同様の構造をもつといわれる (McDonald and Simpson 1999: 200)。同じような円形建物は、ティグリス川の支流アダイム川の、ダム建設による水没地域¹³⁾のなかの遺跡、テル・アダイム (Tell Adhaim) やテル・エシュ・ショーケ (Tell esh-Shoke) でも発見されていて、注目に値する。

さて、ネムル遺跡における考古学的に重要だと考えられる発見は、ティグリス川に接するその遺丘のやや上方にある現在の村落のなかでなされている。そこには、中期アッシリア時代と初期王朝時代の墓群があり、発掘された初期王朝時代の墓群のそれぞれの墓からは、副葬品として、スカーレット土器 (Scarlet ware) やニネヴェ 5 期土器 (Ninevite 5 pottery) が見出され、しかも両方の土器が共に副葬品として用いられた墓も、多数発見されたのである (McDonald 1998: 5; McDonald and Simpson 1999: 200; Oates and Oates 2001: 5)。そのなかのある墓では、スカーレット土器のなかにニネヴェ 5 期土器が入られた状態にあったという (McDonald and Simpson 1999: 200)。緋

色という彩文の色彩で特徴づけられるスカーレット土器はディヤラ地域に特有のもので、その地域あるいはその近隣地域における初期王朝時代第 I 期の指標となっている土器である (Porada et al. 1992b: 100, Fig.5: 12)。ニネヴェ 5 期土器は、北メソポタミアの特有のもので、その流行期間は前 3 千年紀前半だと考えられている。スカーレット土器とニネヴェ 5 期土器との共伴関係が確認されたのは初めてのことで、正に北メソポタミアと南メソポタミアの接点がこの遺跡で見出されたことになる。今後、これは、北メソポタミアと南メソポタミアの厳密な編年を樹立するための、年代上のシンクロニズム (synchronism) という観点からの一つの証拠として使われることになるであろう。

ユーフラテス川中流域

ユーフラテス川の中流域のハーン・バグダーディ・ダム建設による水没地域のなかで行われたイラク人自身による発掘調査においても、注目すべきことがら提供されるに至っている。

注目すべきものの一つはシシーン (Shishin) という遺跡での発掘調査である。この遺跡はビチュメンを産する町ヒートの北西約 50 km の地点の、ユーフラテス川の左岸に位置し、発掘調査は 1992 年に行われている。その調査で判明したことは、シシーンが古バビロニア時代の町の遺跡であり、しかも望楼付きの堅固な周壁で町自体が防御されていたという事実である。また、15 枚の古バビロニア語で書かれた楔形文字粘土板文書が発見されている。そして、そのほとんどは書簡であり、バビロン第 1 王朝の王サムスイルナ (Samsuiluna) の治世からその最後の王サムスディタナ (Samsuditana) の治世に至る間の「年名」が見られるものもあるという (McDonald and Simpson 1999: 201; cf. Mohammad 2002: 1)。中年代説に従えば、それらの「年名」は前 1749 年～前 1595 年の間のものであることになる¹⁴⁾。前 1595 年は、言うまでもなく、ヒッタイト王ムルシリ 1 世 (Muršili I) 率いるヒッタイト軍がバビロンを急襲、バビロン第 1 王朝が滅んだ年である。さらに、それらの文書のなかに見られる地名はすべて、「マリ文書」のなかに出てくるものでもあるという (Brinkman 1977: 337)。実は、この遺跡で着目されることは、出土粘土板文書一枚に現れる町の名である (Mohammad 2002: 2, Text 1)。それは歴史地理学的観点から重要視されるべき町で、その名をヤブリーヤ (Yabliya) という。

「マリ文書」によれば、ヤブリーヤは防御壁を擁し城塞化された町であつたらしい。当時、アッシュールの王位を篡奪して、シュバト・エンリル (Šubat-Enlil) を首都とする「シャムシ・アダド王国」ともいべき領域国家を築き上げたシャムシ・アダド 1 世 (Šamši-Adad I) は、二人の

息子たちをそれぞれその王国の東方経営と南方経営の任にあたらせていたが、弟のヤスマフ・アダド (Yasmah-Adad) が交易都市マリ (Mari) を統治し王国の南方経営の任にあったことは周知のことからであろう。「マリ文書」によれば、「シャムシ・アダド王国」の南方方面における防衛線の一角を担う町としてヤブリーヤがあったようである。シャムシ・アダド1世 (中年代説による治世年、前1813年～前1781年) の死後、その王国は崩壊へと向かうが、そこで幾つかの歴史的事件が起きる。よく知られるのは、イバル・ピ・エル2世 (Ibal-pi-El II) 治下のエシュヌナ (Ešnunna) 王国がマリに向かって突然と軍事行動を起こしたことである¹⁵⁾。そのできごとはそのエシュヌナの王の「年名」として記録されたが、「マリ文書」のなかの書簡からもその軍事行動の詳細が窺われる。「年名」については、イバル・ピ・エル2世の治世9年と10年のそれぞれの年に、「ラピクム (Rapiquim) を破壊した年」と「スバルトゥ (Subartu) とハナ (Hana) の軍隊を撃破した年」として記録されている。つまり、最初のできごとは、実際にはイバル・ピ・エル2世の治世8年 (中年代説では前1777年) に起こったものである。ラピクムはシッパル (Sippar) とヤブリーヤの間の、ユーフラテス川沿いにある町であると考えられているが (Beitzel 1984: 37)、一方、「マリ文書」の書簡は、このときエシュヌナ軍の軍事行動はラピクムの破壊に止まらず、ユーフラテス川をさらに上ってハルベ (Harbe) の町まで至り、さらに城塞ヤブリーヤに向かって進軍してきたことを伝えている。また、その次の「年名」は、翌年 (前1776年) に、エシュヌナ軍が「シャムシ・アダド王国」の軍隊を打ち負かしたことを示しているものだけといえる。結局、エシュヌナ軍はマリに向かって進軍したのであって、それらの事件はヤスマフ・アダドが歴史上から姿を消すという結果をもたらすことになる。しかし、エシュヌナはマリを支配することなく、これらの事件を契機として、ハラブ (Halab [現在のシリア、アレppo]) に首府をおくヤムハド (Yamhad) 王国に逃避していた、前マリ王ヤフドゥン・リム (Yahdun-Lim) の子ジムリ・リム (Zimri-Lim) がマリへ帰還することになるのである。マリの都市自体はその後、中年代説では前1759年に、バビロン第1王朝のハンムラビ (Hammurabi) によって破壊されることになるが、それはハンムラビの「年名」から、よく知られるところであろう¹⁶⁾。

さて、そのような歴史のできごとのなかで言及されるヤブリーヤの町の名は、シシーン遺跡出土文書にも見られるわけだが、重要なのは、ヤブリーヤがどの遺跡に比定されるかという問題に対するヒントをシシーンの史料が与えているかもしれないということである。そこで出土した文書のなかにヤブリーヤの名が載っているのを、シシー

ン遺跡がヤブリーヤであったとするのも一つの考えである (McDonald and Simpson 1999: 201)。シシーン遺跡は確かに「マリ文書」に記載されるような城塞化された町であったことは発掘調査で判明している。この点では、シシーンがヤブリーヤであった可能性が高まる。ただし、ヤブリーヤの名が載るシシーン出土文書の内容はその遺跡がヤブリーヤであったことを直接示唆、すなわち証左するようなものではない¹⁷⁾。それが、シシーンがヤブリーヤであったとする考えの弱点となっている。他方、シシーン遺跡の対岸にある遺跡ジョルディフィーヤ (Jordifiya) でも1992年に短期間の試掘調査が行われ、周壁があることだけは確認されているが、現代の遺跡名の音の類似から、この遺跡こそがヤブリーヤであったのではないかと考える研究者もいる¹⁸⁾。少なくとも、二つの遺跡のどちらかがヤブリーヤであった可能性を、両遺跡の発掘調査は高めたといえよう。しかし、従来の歴史地理学的研究からは、ヤブリーヤは現在の町ハーン・バグダーディと、ハディーサ・ダム建設によって水没したアナの町の間であったと考えられていて (Beitzel 1984: 38)、それが正しいとすれば、両遺跡ともハーン・バグダーディに近すぎ、ヤブリーヤであった可能性は弱まる。ハディーサ・ダム水没地域で国士館大学調査隊が発掘したオウシーヤ ('Usiyeh) がヤブリーヤであったのではないかという疑問が以前から出されていたが、その位置だけは、従来の歴史地理学的な研究の結果にそうものである。とはいえ、シシーンとジョルディフィーヤの発掘調査の結果は、オウシーヤ＝ヤブリーヤという可能性¹⁹⁾を低めているのも事実である。いずれにしても、今後の研究と議論の展開が期待される問題であるといえる。

このようにして、イラク人自身による発掘調査の成果は、歴史地理学的な研究面でも新たな話題を提供してくれているのである。ここで紹介した問題はその一例にすぎない。

北メソポタミア

1987年から1994年にかけて、エスキ・モースル・ダムの貯水湖とリンクする灌漑用水路の敷設に伴う緊急発掘調査が、「ライ・ジャジーラ・プロジェクト (the Ray Jazirah Project)」の名のもと、イラク人自身の手で行われた (Altaweel 2006: 155)。1980年代、同じく灌漑用水路の敷設に伴う発掘事業として、「ノース・ジャジーラ・プロジェクト (the North Jazirah Project)」の名のもとに、テル・アル・ハウワ (Tell al-Hawa) を中心とした一帯が調査されたことがあったが²⁰⁾、「ライ・ジャジーラ・プロジェクト」はその事業の拡大版だといえる。つまり、灌漑用水路を敷設する地域が広げられたため、緊急発掘の対象となる地域も必然的に広がったわけである。そして、そのプロジェクトの発掘調査の対象となる地域は3区画から構成

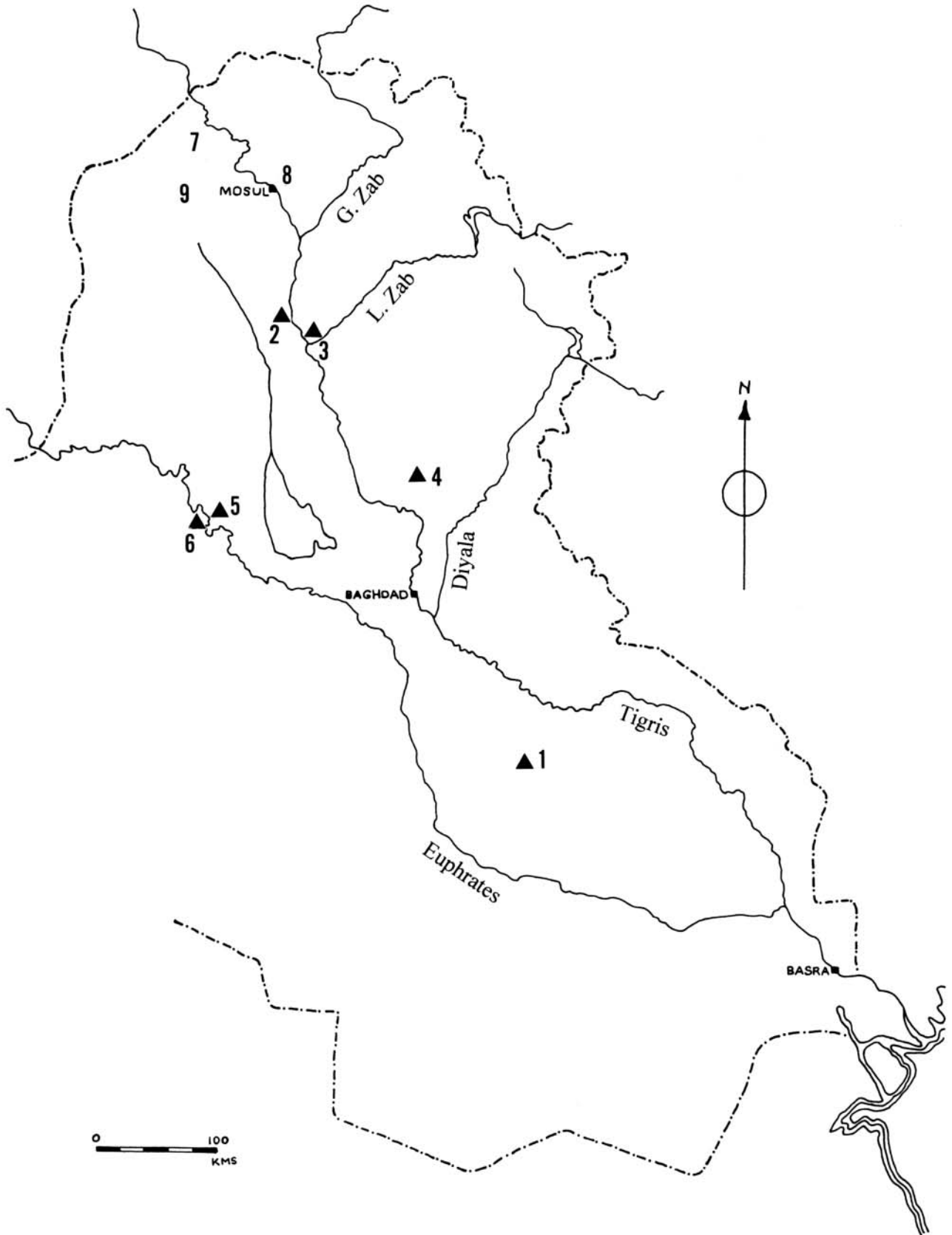


図1 本稿で言及される主な遺跡
(McDonald and Simpson 1999: 197 の遺跡の位置を示す地図を改作)
1. Nippur 2. Aššur 3. Tell en-Neml 4. Tell Adhaim 5. Shishin 6. Jordifiya
7-9. The three areas of the Ray Jazirah Project

されていた。一つはテル・アル・ハウワを中心とする区域(図1:7)、もう一つはモスルの町の北東区域(図1:8)、さらにもう一つはテル・アフアルの町の南方区域(図1:9)であった(Altaweel 2006: 156, Fig.1)。

この事業に伴う発掘の成果については、英国の研究者 M. アルタウィール(Altaweel)が、イラクの調査者たちの協力のもと、アラビア語で書かれた発掘時の調査報告やそのとき出土した遺物のデータを蒐集し、またイラクの調査者たちから出版の許可を得てそれらを取りまとめ、英語で公表するに至っている(Altaweel 2006: 155ff. and 2007: 117ff.)。公表された成果の内容は、確認された層位に関する情報が加味されているという以外は、いわゆる、遺跡分布調査で得られるような成果にとどまっているが、広範囲な地域での調査であるゆえに、時期・時代ごとに遺跡の分布形態を考察していく地理形態学(geomorphology)的な研究に寄与するところが大きいと思われる。今後も、このような成果が公表され続けることを願い、また期待してやまない。

この稿の最後にあたって、発掘調査を容易なものとしないうイラク国内の情勢にもかかわらず、調査を続行するイラクの考古学者たちに頭が下がることを付言し、評価されるべき彼らの努力に対して拍手を送りたい。また、昔日のように、イラクの考古学者と外国の考古学者が協力してそれぞれの遺跡で発掘を押し進め、その成果を基盤にするメソポタミア考古学の研究がさらに一層進展する日が来るであろうことを望んでやまない。我々は、その日が来るまで、過去の発掘データを基盤にした研究を進め、たとえ一歩でも二歩でも前進しておく必要があるのではないだろうか。

註

- 1) 「メソポタミア」という言葉が使われるとき、その範囲は広義で示される場合と狭義で示される場合がある。狭義のものであっても、一般的に、「北メソポタミア」というときはシリア北東部のハブール盆地を含む場合が多い。しかし、本稿では「メソポタミア」と題しているとはいえ、編集者の希望もあり、その内容はイラク国内に限定したものとなっている。
- 2) そのような情報を取り纏めたものが、イラク、英国考古学研究所の雑誌 *Iraq* に掲載されるに至っている (McDonald and Simpson 1999)。それが、イラク国内の発掘調査の動向についての、出版物として現在我々が入手できる最新情報である。
- 3) このことについては、さらに Porada et al. 1992a: 107-108 を参照していただきたい。
- 4) ニップール WF 地区の発掘調査の成果を基盤にしたマクマホンの研究は、1993年にシカゴ大学へ提出された博士論文となっている。また、その発掘の最終報告も最近出版されたばかりである (McMahon 2006)。
- 5) そのような考えの背景には、政治的変化が起ったからといって、その変化がすぐに物質文化(特に土器)に影響を及ぼすはずがない、という考え方があることを付言しておく。とはいえ、実際には、政治的変化が土器に影響を及ぼさなかった例もある。例えば、前2千年紀前半から中葉にかけての北メソポタミアでは、幾多の政治的変化を経たにもかかわらず、ある一定の地域で陶工たちはハブール土器を作り続けたのである。また、政治的変化が土器に影響を及ぼしたと考えられる例もある。中期アッシリア時代においては、アッシリアの領域の拡大と、その領域内で画一的に製作され使われた土器の広がり一致するのである。時期・時代や地域によって、政治的変化と物質文化の変化とのかわりのパターンが異なることがそれらの例から看守されるはずである。いずれにせよ、これらの例においては、なぜそうなったのかということが、今後解釈されるべき問題となるであろう。
- 6) その要点については、McMahon 2006: 145 に簡潔に述べられている。
- 7) ただ、その実証において問題として残ると思われることは、ニップール WF 地区の各層において *in situ* で発見された土器だけを対象にしているわけではないようにみえる点だ。
- 8) その問題については、Gibson and McMahon 1995: 8 と McMahon 2006: 145 でも言及されている。
- 9) その論議については、Matthews 1997 と Gibson and McMahon 1997 を参照していただきたい。
- 10) それは、さらに Matthews 1997: 2 でも引き合いに出されている。
- 11) そのような見解は Matthews 1997: 4 にも見られる。また、Gibson and McMahon 1997: 9 と McMahon 2006: 1 の内容とそれとを比較していただきたい。
- 12) テル・グッパの円形建物については、井・小谷 1981 を参照していただきたい。
- 13) ダム建設によるアダイム川の水没地域については、藤井・井 1990 を見ていただきたい。
- 14) 「中年代説」での王の治世年に関する一覧表は、一般的に、J.A. ブリンクマン (Brinkman) のものが使われてきたが、ブリンクマンのものを基盤にしてより詳しく作成された C.B.F. ウォーカー (Walker) のものが現在最も有用なものである (Walker 1995)。
- また、年代説という点で加えるに、以前は放射性炭素測定年代との関係から「高年代説 (the high chronology)」あるいは「超高年代説 (an ultra-high chronology)」を採用しようとする動きがあったが (e.g. Mellaart 1979)、最近では考古学的遺物(特に土器)の編年との関係から「低年代説 (the low chronology)」あるいは「超低年代説 (an ultra-low chronology)」を採用すべきだという主張が高まってきているので、そのことを念頭においておくことが望まれる。ベルギーのゲント (Ghent) 大学の H. ガーシュ (Gasche) らが中心になって進めた研究は、「超低年代説」の提唱のなかでも金字塔ともいえるべきものである (Gasche et al. 1998)。
- 15) このできごとについては、Beitzel 1984: 36-38 と特に Dalley 1976: 2-7 を参照し、Veenhof 1985: 208-209 の内容と比較していただきたい。
- 16) ハムラビの「年名」については、Oppenheim 1969: 269-271 を参照していただきたい。
- 17) この点については、前川和也先生に、出版されたテキスト (Mohammad 2002: 1-2 [Text 1]) のトランスリタレーション (transliteration) をみていただき、ご示唆をいただいている。この場をかりて感謝の意を表したい。
- 18) これは、フランスの C.N.R.S. のメソポタミア考古学研究者 C. ケピンスキー (Kepinski) の見解である。
- 19) オウシーヤ=ヤブリーヤとする議論については、Oguchi and Oguchi 2006 をご覧いただきたい。

20) テル・アル・ハウワ及びその地域の調査については、Ball, Tucker and Wilkinson 1989 や Ball 1990 など、そして Wilkinson 1990 や Wilkinson and Tucker 1995 などに報告されている。

参考文献

- Altaweel, M. 2006 Excavations in Iraq: The Ray Jazirah Project, First Report. *Iraq* 68: 155-181.
- Altaweel, M. 2007 Excavations in Iraq: The Jazirah Salvage Project, Second Report. *Iraq* 69: 117-144.
- Ball, W. 1990 The Tell al-Hawa Project: The Second and Third Seasons of Excavations at Tell al-Hawa, 1987-88. *Mediterranean Archaeology* 3: 75-92.
- Ball, W., D. Tucker and T.J. Wilkinson 1989 The Tell al-Hawa Project: Archaeological Investigation in the North Jazira 1986-87. *Iraq* 51: 1-66.
- Beitzel, B.J. 1984 Išme-Dagan's Military Actions in the Jezirah: A Geographical Study. *Iraq* 46: 29-42.
- Brinkman, J.A. 1977 Appendix: Mesopotamian Chronology of the Historical Period. In A.L. Oppenheim, *Ancient Mesopotamia. Portrait of a Dead Civilization*, revised edition, completed by E. Reiner, 335-348. Chicago and London, University of Chicago Press.
- Dalley, S. 1976 Chapter I. The Tablets from Room II of the Palace. In S. Dalley, C.B.F. Walker and J.D. Hawkins, *The Old Babylonian Tablets from Tell al Rimah*, 1-30. London, British School of Archaeology in Iraq.
- Gasche, H., J.A. Armstrong, S.W. Cole and V.G. Gurnadyan 1998 *Dating the Fall of Babylon. A Reappraisal of Second-Millennium Chronology*. A Joint Ghent-Chicago-Harvard Project. Mesopotamian History and Environment, Series II, Memoirs IV. Ghent and Chicago, University of Ghent and the Oriental Institute of the University of Chicago.
- Gibson, M. and A. McMahon 1995 Investigation of the Early Dynastic-Akkadian Transition: Report of the 18th and 19th Seasons of Excavation in Area WF, Nippur. *Iraq* 57: 1-39.
- Gibson, M. and A. McMahon 1997 The Early Dynastic-Akkadian Transition, Part 2. The Authors' Response. *Iraq* 59: 9-14.
- Matthews, D. 1997 The Early Dynastic-Akkadian Transition, Part 1. When did the Akkadian Period begin? *Iraq* 59: 1-7.
- McDonald, H. 1998 News from Baghdad. *British School of Archaeology in Iraq, Newsletter*, 2: 4-6.
- McDonald, H. and S.J. Simpson 1999 Recent Excavations in Iraq. *Iraq* 61: 195-202.
- McMahon, A. 2006 *The Early Dynastic to Akkadian Transition. The Area WF Sounding at Nippur*. Nippur V. O.I.P. 129. Chicago, Oriental Institute of the University of Chicago.
- Mellaart, J. 1979 Egyptian and Near Eastern Chronology: Dilemma? *Antiquity* 53: 6-18.
- Mohammad, A.K. 2002 Text from Šišin. *Akkadica* 123: 1-10.
- Oates, D. and J. Oates 2001 News from Baghdad. *British School of Archaeology in Iraq, Newsletter* 7: 4-6.
- Oguchi, K. and H. Oguchi 2006 Japanese Excavations at 'Usiyeh. In C. Kepinski, O. Lecomte and A. Tenu (eds.), *Studia Euphratica. Le moyen Euphrate iraquien révélé par les fouilles preventives de Haditha*. Travaux de la Maison René-Ginouvé 3, 157-189. Paris, De Boccard.
- Oppenheim, A.L. 1969 1. List of Date Formulae of the Reign of Hammurabi in Texts from Hammurabi to the Downfall of the Assyrian Empire, in Babylonian and Assyrian Historical Texts. In J.B. Pritchard (ed.), *Ancient Near Eastern Texts. Relating to the Old Testament*, 3rd edition, 269-271. Princeton, Princeton University Press.
- Porada, E., D.P. Hansen, S. Dunham and S.H. Babcock 1992a The Chronology of Mesopotamia, ca. 7000-1600 B.C. In R.W. Ehrich (ed.), *Chronologies in Old World Archaeology*, 3rd edition, Vol.I, 77-121. Chicago and London, University of Chicago Press.
- Porada, E., D.P. Hansen, S. Dunham and S.H. Babcock 1992b 5. Mesopotamia in Part One: The Near and Middle East. In R.W. Ehrich (ed.), *Chronologies in Old World Archaeology*, 3rd edition, Vol.II, 90-124. Chicago and London, University of Chicago Press.
- Veenhof, K.R. 1985 Eponyms of the 'Later Old Assyrian Period' and Mari Chronology. *Mari, Annales de Recherches Interdisciplinaires* 4: 191-218.
- Walker, C.B.F. 1995 Mesopotamian Chronology. In D. Collon, *Ancient Near Eastern Art*, 230-238. London, British Museum Press.
- Wilkinson, T.J. 1990 The Development of Settlement in the North Jazira between the 7th and 1st Millennium BC. *Iraq* 52: 49-62.
- Wilkinson, T.J. and D.J. Tucker 1995 *Settlement Development in the North Jazira, Iraq. A Study of the Archaeological Landscape*. Iraq Archaeological Reports 3. London, British School of Archaeology in Iraq.
- 井博幸・小谷伸男 1981 「イラク・ハムリン発掘調査概報、II. テル・グッパ」『ラフィダーン』2巻 16-19頁。
- 藤井秀夫・井博幸 1990 「アル・アゲイム地域の予備調査」『ラフィダーン』11巻 245-252頁。

小口 裕通

国士舘大学イラク古代文化研究所

Hiromichi OGUCHI

The Institute for Cultural Studies of Ancient Iraq, Kokushikan University